

「おほけなき心」考

要 旨

源氏物語の「紅葉賀」の巻の冒頭で、桐壺帝の朱雀院行幸における試案のことが語られ、源氏と頭中将が青海波を舞い、当日の見ものであったが、藤壺は「おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えまし」と思ったという。この「おほけなき心」の解釈について、中世、近世では、(1)源氏の藤壺に対する恋心、(2)源氏と藤壺との密通をいうとする二説があり、近代では、(3)父帝の妃たる藤壺に対する源氏の分不相応な心、(4)帝の寵愛を受けながら源氏と通じた藤壺の苦悩、(5)桐壺帝から特別の愛を受けた源氏の身分不相応な心に加えて、帝への裏切りと畏怖の意識を読む説等がある。

源氏物語には「おほけなし」の用例が二十九例ある。その検討によれば、「紅葉賀」の巻冒頭の「おほけなき心」は、(3)の説をとるべきものと考えられる。

(一) 朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなり。世の常ならず、おもしろかるべきたびのことなりければ、御方々、物見たまはぬことをくちをしがりたまふ。上も、藤壺の見たまはざらむを、飽かずおほさるれば、試案を御前にてせさせたまふ。源氏の中將は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭の中將、容貌、用意、

* 山 本 利 達

人にはことなるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。入りかたの日かげ、さやかにさしたるに、楽の声まさり、もののおもしろきほどに、同じ舞の足踏み、おももち、世に見えぬさまなり。詠などしたまへるは、これや、仏の御迦陵頻伽の声ならむと聞こゆ。おもしろくあはれなるに、帝、涙をのこひたまひ、上達部、親王たちも、みな泣きたまひぬ。詠果てて、袖うちなほしたまへるに、待ちとりたる楽のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光ると見えたまふ。春宮の女御、かくめでたきにつけても、ただならずおほして、「神など、空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」とのたまふを、若き女房などは、心憂しと耳とどめけり。藤壺は、おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えましとおほすに、夢のこちなむしたまひける。

(紅葉賀一一―一二頁―新潮日本古典集成による。以下同じ。)

「紅葉賀」の巻の冒頭である。この文中の傍線部の「おほけなき心のなからましかば」についての中世や近世の注を見ると、

(A)「彼心かけ給事なからましかばとおほす也」と『細流抄』はいい、『岷江入楚』『湖月抄』は、(A)説と(B)説をあげ、加茂真淵の『源氏物語新釈』は(B)説をとっている。

近現代の主な注を見てみよう。

(C)「父帝の女御たる自分に恋するなどいふ分不相応な心が源氏になかったら」と金子元臣氏の『定本源氏物語新解』にあり、吉沢義則氏の『対校源氏物語新釈』、『日本古典文学大系』、松尾聡氏の『源氏物語全釈』、『新潮日本古典集成』が同様の説である。

(D)「勿体ない心のわだかまりなぞなしにてあつたら」と島津久基氏の『源氏物語講話』にあり、『日本古典文学全集』の頭注には、「おほけなき心」は身分不相応な、畏れ多いの意。ここは帝の寵愛を受ける身でありながらも、源氏と交わってしまった藤壺の苦悩をさす」と藤壺の帝に対する心と解されており、現代語訳では、「自分に大それた心のわだかまりがなかったら」とある。『完訳日本の古典』、『新編日本古典文学全集』も同様である。

玉上琢弥先生の『源氏物語評釈』の鑑賞欄では次のように述べていられる。

「おほけなき心」とは光る源氏に傾く藤壺の心とするより、光る源氏と交わしたかの物のまぎれをうけての心ととつたほうがよいと思う。あの時の感覚と気持は今なお藤壺の心の中に生きている。その心と身体のまま藤壺は帝の傍にはべっている。帝の御寵愛と自らの位置を考えれば、分をこえた正に「おほけなき心」である。

これも(D)説と解される。『新日本古典文学大系』には、「(自分に)だいたいそれた気持がなかったとしたら。源氏との密通を恐れる気持をさす」とある。「源氏との密通を恐れる気持」をさして「おほけなき心」といったとの説であるが、藤壺の帝に対する心というところから(D)説に属するであろう。

近現代の注釈書における説は右の如くであるが、今西祐一郎氏は「罪意識の基底―源氏物語の密通をめぐる―」^(註1)において次のように述べていられる。

(E)出自の劣る更衣を母として生まれ、しかも幼くして母に死別、はか

ばかしい後見も持たない孤児的存在であった光源氏にとつて、その父桐壺帝とは、彼を右大臣家に生まれた「儲の君」、第一皇子以上に寵愛し、格別な庇護を与え何かにつけてその将来を配慮してくれた父親であった。とすれば、そのような父親の妃と密かに通じるといふことは、当然、単なる身分不相応といった一般的な意味合いのみならず、そのような自身に対する寵愛、そしてそのような寵愛に値する者と自身を見なしてくれた父親の信頼への裏切りという様相を帯びざるをえない。「おほけなき心」は、右のような物語の人間関係の機微を背景に、光源氏の桐壺帝に対する、裏切りとその畏怖の意識を表わしているということができようであろう。

このように今西氏は源氏の帝に対する裏切りと畏怖の意識を「おほけなき心」が示すとされている。

阿部秋生氏は「藤壺の宮と光源氏」^(註2)において、「おほけなき心」とは、「身分の低い者が高い者に不遜な態度をとるとか行動を加えようとすると心根をいう言葉である。この場合で具体的にいえば、(a)帝の深い寵愛をえているのに、源氏と密かに通じて身籠ってしまったことを悩む藤壺の宮自身の気持をいうものとする説と、(b)父帝の女御藤壺の宮に強く恋着する源氏の気持についていうものとする説とがある」と述べられ、更に、

この「おほけなき心」が、藤壺の宮が桐壺帝に対して負目を感じていることを言うのか、源氏が藤壺の宮に対して身の程しらずの愛情をもつことをきめつけているのかを、決定的にいざれとするのは困難だが、後者の説を採りえないとすることもできない。

と述べていられる。現代の注釈書が(a)説による傾向に対し、(b)説も成立しうるとして、二説いざれとも決めがたいとされている。前述の(A)説は内容的な注であり、(A)説は(C)説につながり、(C)説は

	巻名	頁	表現の形	文の種類	事柄
28	浮舟	八八	ゞきこと	右近の浮舟への詞	浮舟のために右近のたてる計略
27	浮舟	六九	ゞく思ひなしはべる	浮舟の母の舟の尼への詞	浮舟に薫と結婚させること
26	東屋	二八四	ゞく心幼きこと	常陸介の浮舟の母への詞	浮舟の母が常陸介の娘の求婚者と浮舟を結婚させようとしたこと
25	東屋	二八三	ゞくとも	浮舟の母の心中	浮舟に薫と結婚させること
24	宿木	一五七	ゞかりける	地	薫が女二宮でなく女一宮ならもらいたいと思うこと
23	竹河	二四七	ゞかりけるみづからの心	玉鬘の薫への詞	玉鬘が大君を冷泉院に入内させたこと
22	御法	一一五	ゞき心はなかりしかど	地	夕霧の紫上に対する心
21	柏木	二九六	ゞき心	地	柏木の心に対する女三宮の評価
20	柏木	二七二	ゞき心	柏木の小侍従への詞	柏木の女三宮に対してもった心
19	柏木	二七〇	ゞき心	地	柏木の女三宮に対してもった心
18	若菜下	二三八	ゞきもの	柏木の心中	女三宮に通じた柏木の心
17	若菜下	二二三	ゞき人の心	源氏の心中	源氏が女三宮を訪れたことを柏木が嫉妬すること
16	若菜下	二二七	ゞく心あやまりして	地	源氏が女三宮に対する振舞
15	若菜下	二〇六	ゞきさま	柏木の女三宮への詞	柏木の女三宮に対する評価
14	若菜下	二〇六	ゞき心	柏木の女三宮への詞	柏木が女三宮を恋い慕う気持
13	若菜下	二〇二	ゞき心	小侍従の柏木への詞	柏木が女三宮に心中を語ること
12	若菜下	二〇二	ゞき心は思ひ離れてはべり	柏木の女三宮への詞	柏木が女三宮に通じること
11	若菜下	二〇一	ゞ	小侍従の柏木への詞	女三宮への柏木の恋心に対する非難
10	若菜下	一七七	ゞき心のしたまはず	地	夕霧が紫上に対して抱く気持
9	若菜下	一五三	ゞく御覽す	地	明石入道の願に対する源氏の感想
8	若菜上	一四一	ゞきこと	地	柏木が女三宮を得たいと思うこと
7	若菜上	一二二	ゞき心にしもあらねど	地	夕霧が女三宮に対して抱く気持
6	玉鬘	三〇六	ゞけれ	源氏の紫上への詞	紫上が源氏に連れ添っていること
5	少女	二三二	ゞくいかなる御仲らひ	草子地	夕霧が雲井雁と契りを結んだこと
4	薄雲	一八五	ゞし	源氏の心中	明石方が京での住まいをするまいと思っっていること
3	賢木	一五三	ゞき心	源氏の藤壺への詞	源氏の藤壺に迫ろうとする心
2	葵	六六	心のゞき	源氏の心中	源氏の藤壺を恋していること
1	夕顔	一五四	ゞく、あるまじき心	源氏の心中	源氏の藤壺への恋の心

(注)「表現の形」の欄の「ゞ」は「おほけなし」の語幹「おほけな」を示している。

阿部氏の(b)説である。また、(B)説は(D)説につながり、(D)説は阿部氏の(a)説といふことで、中世から現代まで二つの説があり、現代では、(D)説において「おほけなき心」に密通による藤壺の苦悩や恐れや恐れへの気持が表れているとする。また、帝の信頼に対する源氏の裏切りと、畏怖を讀みとせんとする(B)説も出ている。「おほけなき心」とは、このように種々の解を生む言葉なのであろうか。源氏物語の中には「おほけなし」の語は二十九例ある。(一)にあげた紅葉賀の例以外の二十八例の用いられ方は、前頁の表の通りである。これらの検討をすることにしよう。

前頁の表に見られるように、「おほけなし」は、会話の詞にも、心中表現にも、地の文にも用いられており、2・5・8の解釈以外は、諸注いずれも、身の程知らずとか、だいそれたの意である。2の「心のおほけなき」は、だいそれた心の意の他に、不義の關係とする説があり、8には「源氏を裏切る畏怖感」とする説があるが、それ以外に異説はない。ただし、5の注はそうではない。5の文は次の通りである。

(二) 御後見どもも、何かは、若き御心どちなれば、年ごろ見ならひたまへる御あはひを、にはかにもいかかがはもて離れはしたなめきこえむと見るに、女君こそ何心なく幼くおはすれど、男は、さこそものげなきほどと見きこゆれ、おほけなく、いかなる御仲らひにかありけむ。(少女二二三頁)

吉沢氏の『対校源氏物語新釈』、『日本古典文学大系』、玉上先生の『源氏物語評釈』、『日本古典文学全集』は、「年に似合わず」の意と注されている。『新潮日本古典集成』が「いっばしに」と注されているのも同様の解といえよう。『新編日本古典文学全集』と『新日本古典文学大系』が「だいそれた」と注していられるのも、両者の年齢としては常識を超えただいそれたの意と解されているようである。

この用い方は、両者の身分の上下関係は条件となっていない。幼い雲井雁が「姫君」として、また、「ものげなきほど」と思っていた夕霧が「男」として契りを結んだことを「おほけなし」と草子地で評したものと考えられる。

日本国語大辞典には、「おほけなし」の語源説として、①オホケナシ(大気甚)、②オフケナシ(負気無)、③覚気も無しということ、覚束なきという義、④アフケナシ(仰気無)の意をあげている。文字使いからも意味上からも、この中では①に妥当性があるように思えるが、意味上から語構成を推察するに、「オホ(大)シ」の語幹十接尾語「ケ」+「ナシ(甚しい)」で、大胆である、だいそれたの意ではないかと思われる。

今昔物語集巻二九第三三、「肥後国鷲、咋殺蛇語」は、眠っている鷲の窟の本まで大蛇が呑み、体に五六回巻きついたが、鷲に大蛇が殺されるという寓話めいた話であるが、語り手は、「此レヲ思フニ、蛇ノ魂ノ極テ啼キ也。本ヨリ蛇ハ我レヨリ大キナル物ヲ呑ムトハ云乍ラ、鷲ヲ思ヒ懸ルガ極テ愚ナル也」と評している。大蛇が呑む相手として鷲に挑むのはだいそれたこと、分を越えているという判断と思われる。この例や(二)の例を思い合せると、「おほけなし」は、身分の下の者から上の者に対する行為に対していうものという限定はなく、だいそれた、大胆な、身の程しらず等の意と思われ、源氏物語の二八例の解もその意味の範囲で解される。

(三) ……ましてこの宮は、人の御ほどを思ふにも、限りなく心ことなる御ほどに、取り分きたる御けしきにしもあらず、人目の飾りばかりにこそ、と見たてまつり知るに、わざとおほけなき心にしもあらねど、見たてまつるをりありなむやと、ゆかしく思ひきこえたまひけり。(若菜上一二二頁)

表の7の文で、夕霧が、父の妻たる女三宮に特別に逢いたいという気

持はないが、折あらば見たいと思つたところである。「見たてまつるをりありなむやと、ゆかしく思」う段階を越えた気持、逢いたいというような気持になれば、それは「おほけなき心」ということになる。夕霧の父の妻たる紫上に対して同様の例がある。表の10と22の場合である。

(四) この御方をば、何ごとも思ひ及ぶべきかたなく、氣遠くて、年ごろ過ぎぬれば、いかでか、ただおほかたに心寄せあるさまをも見えたてまつらむとばかりの、くちをししく嘆かしきなりけり。あながちに、あるまじくおほけなき心などは、さらにものしたまはず、いとよくもてをさめたまへり。(若菜下一七七頁)

(五) 年ごろ、何やかやと、おほけなき心はなかりしかど、いかならむ世に、ありしばかりも見たてまつらむ、ほのかにも御声をだに聞かぬこと、など、心にも離れず思ひわたりつるものを、声はつひに聞かせたまはずなりぬるにこそはあめれ、むなしき御骸にても、今一度見たてまつらむの心ざしかなふべきをりは、ただ今よりほかにいかでかあらむ、と思ふに、(御法一一五―一六頁)

(四) において、「おほかたに心寄せあるさまをも見えたてまつらむ」と思うのは「おほけなき心」ではない。(五) において、「ありしばかりも見たてまつらむ、ほのかにも御声をだに」聞きたいと思つていたのも「おほけなき心」ではない。(三) (四) (五) に見たところからすれば、父の妻である継母に対して、子の立場の者が男女の關係として逢いたいという思いをもてば、それは「おほけなき心」ということにならう。表の123は、源氏の藤壺に対する心の場合である。

(六) からうして、鶏の声はるかに聞こゆるに、命をかけて、何の契りにかかる目を見るらむ、わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり、(夕顔一五四頁)

(七) 「人のため、はちがましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の怨みな負ひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほけなきさをきこしめしついたらむ時と、恐ろしければ、かしまりてまかでたまひぬ。(葵六六頁)

(八) せめて從ひきこえざらむもかたじけなく、心はつかしき御けはひなれば、「ただかばかりにても、時々いみじき愁へをだにはるけはべりぬべくは、何のおほけなき心もはべらじ」など、たゆめきこえたまふべし。(賢木一五三頁)

(六) は「かかる筋に」「あるまじき心」というのだから、藤壺に対する心と解され、(七) の場合は、源氏の心中を述べるところで、誰に対する心と明らかには述べてはいないが、桐壺院の忠告に対して、「けしからぬ心のおほけなきさをきこしめしついたらむ時と、恐ろしければ」というところから、藤壺に対する心と解される。(八) は、源氏が藤壺に直接逢つていうのだから、ここの「おほけなき心」は、藤壺に通じようとする心になる。

(九) 「今はよし、過ぎにしかたをば聞こえじや。ただかくありがたきものの際に、気近きほどにて、この心のうちに思ふことの端、すこし聞こえさせつべくたばかりたまへ。おほけなき心は、すべて、よし見たまへ、いと恐ろしければ、思ひ離れてはべり」(若菜下二〇二頁)

(一〇) 「これよりおほけなき心は、いかがはあらむ。いとむくつきことをもおほし寄りけるかな。何しに参りつらむ」と、はちふく。(若菜下二〇二頁)

表の12と13の文である。(九) は、紫上を二条院に移して源氏が看護のため不在中に、女三宮に柏木が思いを述べる機会を作るよう小侍従に語るところで、思いを述べる以上に「おほけなき心」は「思ひ離れてはべり」というのだから、ここの「おほけなき心」は、女三宮に通

じようとの思いをいうものである。それに対して、小侍従の非難の言葉が(一〇)である。「これより」の「これ」は、柏木が女三宮に思いを述べたいということをさし、そのことが「おほけなき心」だと非難したことになる。

このように、「おほけなき心」が、男が、継母や人妻である女性に逢つて思いを述べたいと思うこと、さらに、通じようと思うこと、いずれについても、「おほけなき心」といわれているが、(一一)の(D)説のように、夫のある女性から夫以外の男性を思慕したり、関係をもつことについて「おほけなき心」という例は見られない。

(一二) 尼宮は、おほけなき心もうたてのみおほされて、世に長かれとしもおほさざりしを、かくなむと聞きたまふは、さすがにいとあはれなりかし。(柏木二九六頁)

表21の文である。柏木の思慕を、受手の女三宮が、「おほけなき心」と思ったのである。

以上の検討からすると、源氏物語では、「おほけなき心」の用い方としては、(一一)の(D)説、および(E)説は、例を見出しえない説ということになる。「おほけなき心」の用例からすれば、(一一)の場合も、源氏の藤壺に対する思慕をいうととるべきであろう。帝の妃への継子の恋は、子として世に認められない恋である。それを「おほけなき心」といつている。「おほけなき心のなからましかば」とは、藤壺は、密通に及ぶ程源氏に強く思慕され、子としての分を超えた心をもたれているため、源氏の舞を素直に評価できない身であることをいつたものといふことになろう。

注

- (1) 「国語と国文学」昭和48年5月号
- (2) 「文学」平成元年8月号
- (3) 金子元臣氏『源氏物語新解』吉沢義則氏『対校源氏物語新釈』『日本古典文学大系』
- (4) 『完訳日本の古典』
- (5) 類聚名義抄、前田家本及び黒川本色波字類抄、十卷本伊呂波字類抄に「略」は「オホケナシ」と読まれている。
- (6) 字津保物語「国譲下」では、仲頼のあて宮に対する恋を「おほけなき心」といつている。兄妹関係の恋で、許されない恋という観点からいわれている。
- (7) 森一郎氏の「藤壺宮の造型(上)―敬語法を視座として―」(『王朝文学研究』第七号)において、(二)の「おほけなき心」は、「おほけなき心」と無敬語であり、「見えまし」とあつて「見えたまはまし」となっていないことから、源氏の藤壺に対する思慕の情と解していられる。なお、「身分的に分を越えた、互いの位置を考へるとき正におそれ多い心ではないか」という源氏への批判、非難のこもる無敬語であろう」とも述べていられる。しかし、形容詞には敬語がつかない(北山谿太氏『源氏物語の語法』)から、「おほけなし」に敬語がないのが自然であり、「心」と「見えまし」に敬語がないのは、帝、春宮の女御、藤壺、上達部、親王達のいるこの場面での敬語使用の程度を見ると、藤壺の心中で源氏に対して敬語がなくても不自然ではないと思われる。

Research on *Ohkenaki Kokoro*

Ritatsu YAMAMOTO